
Love Letter

創離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love Letter

【Nコード】

N0749V

【作者名】

創離

【あらすじ】

時間の止まったこの世界、しかしその時間は動き出していた。タイムリミットは近い、俺は何を救うのだろう。

開幕・手紙（前書き）

うーん、読み返すとやっぱりいまいち

どこにでもある様な話ですので、読む必要もないです。

うーん

開幕・手紙

てがみ、手紙、テガミ、TEGAMI……手紙と言う物は面白い。
そんな風に感じてしまう。

英語で書くとLetterになる。

愛を記した手紙は Love Letter になるのだろう。

私の最初で最後のラブレター、彼は気付いてくれるだろうか。

明日は手紙を出す日、そしてもうすぐ彼に会える。睡眠はたくさんとっておこう。

それじゃ、おやすみ。

『糸崎 結城様へ』

四年前の夏の日、もう一度会おうと約束した女の子の事を……覚えてないとは言わせません。

さて、あなたの前から姿を消してはや四年。私はあなたの元を離れましたが、ずっとあなたを見ていました。

時間の止まったその世界で、その心で苦しみ続けるあなたを見るのは苦痛でした。

今年の夏、約束の日に帰れそうです。なので結城君にあの時の返事を聞きたいと思います。

この手紙が届いた日、懐かしのあの場所に来てください。

あの日の答え、良く考えてください』

開幕・手紙（後書き）

ちなみに、タイトルの由来は

『夜中に書いたラブレターを読み返してはいけない』
と言う、格言（？）から

これは、プロローグに当たります。

付けようかどうか迷いましたが、一応書いたので付けておきます

その一（前書き）

でわでわ、本編入りまーす。
もう書くことも無いな

その一

今朝手紙が届いた。

送り主の名前の書いてない不思議な手紙だ。

手紙内容は、手紙を読んだら秘密の場所に来い、という物だった。まあ、手紙だとは驚いたが、俺にコンタクトを取って来るのはあいつだけなので送り主が書いてなくてもすぐにわかる。

四年前の……思い出、俺にとって忘れようもない思い出。

「呼び出しの日に手紙が届くなんて……せめて一日前に届けとけよ」未だに自転車が主な移動手段である俺にとって、あの場所までの移動は地獄の様だった。

「心構えもあるだろうが！」

そうこうしている内に、約束の場所。つまりは近所の山に着いた。「……はあ、今からこれを昇る訳か。分かつちやいたが、目の前にするときついモノがあるな」

かごに入れていたタオルを取り出し、真夏の登山を開始する。

しかし、山頂まで登る訳ではない。それが唯一の救いだっただ。

「おーい、いくぜ！」

「おう！ さっさと行けよ！」

途中、子供たちが川で遊んでいる声が聞こえた。

山の中が涼しいとはいえ、それでもだいぶ暑かったので頭に熱が回ったのだろう。中途半端に体の機能が残っているので、微妙に困る。

「ああ、この辺だったか？」

俺は小さな懐かしいけもの道に入っていく。

「こういつ時だけは背が小さくて良かったともうよな。もてないけど……」

けもの道の中は暗く狭く、途中で道を間違って自分で道を作りながら進んでいるんじゃないかと思えた。

「そろそろ出口の筈なんだが」
それでも出口が見えずに進んでいく。

「……道を間違えたか」
俺は後50M頑張つて、出口が見つからなければ戻ろうと心に決めた。

…

……

……25M

…

……

……50M

「戻るか」

戻るべく体を後ろに戻そうとすると、横から光が漏れているのが
うかがえた。

「……こつちか？」

俺は体をそちらに向け、多少強引に進んでいく。
そうすると、多少開けた場所に出た。

より正確に言うなら、ココが秘密の場所だった。

「やっと着いたか、はあ」

そこは公園だった。全体的に古びてはいるが昔と変わらない。ま
あ、当たり前だが。

「やっぱり変わってないな、ココなら変わってるかとも思ったけど」
俺は近くにあったベンチに腰掛ける。

「懐かしいな、たった二週間だけどあいつとずっと一緒に居たんだ
よなあ」

最初のうちは喧嘩ばかりで、いつの間にか唯一心を許せる仲に
なっていた。

「てか、時間書いとかないと待ち合わせにならないだろう。」

『まったー？』

『今来たところだよ』

って、定番のノリが出来ないじゃないか」

まあ、時間なんて書かれても時間を知る術なんて太陽位しかなんだが。

「まったー?」

「うわぁ!」

後ろから声がかかり、俺は前のめりに倒れるように立ち上がった。「独り言いう癖、治ってないのね。少し不気味よ」

「お前も、人の背後から近くづく癖直せよ。いつとも後ろから近づいてきやがって」

「だって、ゆう君が驚くの楽しんだもの」

ブルーのワンピースに何処かの野球球団のキャップと言う不思議な格好の、四年前の少女の面影を残した女性がそこにいた。

「ゆう君、私の事覚えてる?」

「逆に、中学校の時の思い出なんてお前のことくらいしか覚えてなかったんだよ。良かったな、俺が友達沢山作るタイプじゃなくて」

「友達作るタイプじゃないんじゃない?……友達を作れないタイプの間違いでしょ?」

二人ともそれが意味のない会話である事を知っていた。そもそも俺が忘れるわけがないのだ。そう言う風になってしまったのだから「うるせーよ。お前こそこんな所にはば毎日来るくらいには友達いなかったじゃないか」

「私は友達いたけど、ゆう君に構ってあげただけ」

「そんな構ってあげてた奴に四年越しで会いに来たのかよ」

「……相変わらずイジワルだね。だから童貞なのね」

「しょうがないだろうが!」

「魔法使い目指せるって」

「目指せねーよ!」

「さて、四年ぶりの問題です。私の名前は次のうちどれ

A・後藤 千秋

B・今泉 佳奈美

C・戸高 愛

「さあ、どれ？」

俺はベンチに乗っかり堂々と指差してやる。

「答えはどれでもない！ お前の名前は、五十嵐 井波だ！」

井波はぱちぱちと口で言いながら拍手を送る。

「今泉 佳奈美とか言われたらどうしようかと思ったよ」

「ふ、何度もひっかけに引っ掛かるほど俺は甘くないわ！」

「名前を覚えてたのはすごいけど、実は私は五十嵐 香住。井波の妹よ」

「な！」

「ま、嘘なんだけど」

「なな！」

「て言うのが嘘」

「ななな！」

「でも実は」

「もういい、同じネタは三回までだ」

「今のを三回目と数えるか、その前を三回目と数えるか、意見が分かれそうね」

「分かれんだろっ」

「そうかな」

むむむ、と言いながら井波はベンチに腰掛ける。

「まあ、いいか。」

「……ゆう君、私がここに来た理由、分かるよね」

「……」

俺は押し黙る。

「あの時の返事、聞かせて」

「……」

「そろそろ、この世界の時間が動き出すわ。」

それに、この世界を維持するのも限界よ」

「……」

「ゆう君、あなたは世界とわたし、どちらを救うの？」

暑い夏の日だったからだろうか、めまいを感じた。

その一（後書き）

と言いついで、一幕 その一でした。
もう、何も語ることはない。

その二（前書き）

一日一話更新を目指しています。

まあ、一応書き終わった作品なので、パソコン開いてコピって貼るだけです。

その二

あれは今日と同じ8月16日、俺は一人の少女と出会った。

少女名前は五十嵐 井波。いつも同じ野球帽に、ブルーのワンピースを着ていた。

俺はいつもと同じように、山のけもの道を進んだ先にある古びた公園に出かけていた。

そこがいつもの俺の定位置、しかしその日に限って先客がいた。

「だれだ！」

「だれ？ そうだね、現代を生きる陰陽師よ」

それが第一声だった。

「陰陽師い？ 馬鹿じゃねえの？」

「いつも同じ事を言うのね。まあ、嘘なんだけど」

「嘘なのかよ！」

「当然よ。そんな職業ある訳ないじゃない」

少女はベンチから立ち上がりこちらへ歩いてきた。

「あなたのお名前は？」

「糸崎 結城。お前は」

「私？ うーんと、それじゃあ……」

「でーん！」

私の名前は次の内どれでしょう

A・森 光江

B・藤堂 早苗

C・伊庭 良子

「え？ え？」

あの頃からこんな質問を繰り返していた。

「えーと、A・森 光江？」

「ぶつぷー！ 答えはどれでもない、よ

残念、また明日来てください」

「初対面で分かるかあ！」

「確かそんな事を叫んでいた筈だ。」

「しょうがないわね。じゃ、ヒントよ」

「素直に名前教しえろよ」

「私は処女です」

「いらねえ！」

「え？ もちろん私の処女はあげないわよ」

「初対面の女子の処女を欲しがるような変態じゃねえよ！」

「まったく？ 一ミリも？ それはショックだわ。女子を傷つける

なんて最低ね。だから童貞なのよ」

「中学生で童貞じゃなかったら逆にやばいよ！」

「あら、最近は中学でみんな済ませてるわ」

「え？ まじで？」

「この時、俺はマジで焦ってた気がする。」

「さあ？ 私学校行ってないし、その手の事は分からないわ」

「おい！ …… いやそれより、学校に行っていない？ ということだ」

「女の過去を詮索するなんて、この童貞野郎は現実の女に対する接し方が分からないのね。二次コンキモヲタ」

「心折れた！」

別に二次コンでもキモヲタでも無かったが、ココまで言われると心が折れた。

「あ、私の名前は五十嵐 井波よ。よろしく、童貞さん」

「このタイミングで?! なぜ!?!」

その時の彼女の顔は、吃驚するほど満面の笑みだった。

「さて、童貞さん」

「糸崎と呼んでください」

「え？ 名前なんてどうでもいいわ」

「お願いします！」

「じゃあ、ゆう君」

「いきなりフレンドリー！」

「良いから話を進めるわよ」

「……おう」

「ゆう君は、何か悩みがあるわね」

「……」

あの時、井波がいきなり真面目な顔で言ってきたから、ついどう反応していいか分からず押し黙ってしまった。

「それも、割と本気で悩んでる。実害もあるのかしら、いや、実害があるタイプね。」

それもかなり悪質、明らかに悪意を持った集団が関係する様な感じかしら」

実際その通りだった。集団でのいじめに遭っていたし、実害と言うなら腹を殴られたり恐喝されたり、お遊びから発展したと言うよりは悪意から始まった苛めだった。

「あなたはココに来てはいけないわ、ココだけはダメ」

「……うるさい、初対面のお前になんだかんだ言われる筋合いはない」

「そう、ココに来るのね。じゃあ、ココに来るのは私がいる間だけにしなさい。」

今年の夏休みが終わるまで、夏休みが終わったら来たらダメ、分かった？」

「知るか！」

俺はそうってその日は帰っていった。まだ来たばかりだったが、井波と一緒にいたくなかったのだ。

だけど、行く所も無かった俺はけもの道の中で一日を過ごした気がする。

その二（後書き）

次回、第三話で一幕は終りです。

読み返してみるとやっぱり、

「あー、なんじゃこりゃ。俺こんなん書いたの？ 馬鹿なの？」
となります。

もう、泣きたい

その三（前書き）

第一幕はこれで最後です

その三

「ゆう君、大丈夫？」

先ほどまで聞いていた声と同じ声で起こされる。

「……井波、か？」

「そうよ、ゆう君がいきなり倒れたものだから驚いたわ
見ると、そこには白い空間が広がっていた。」

「どこだ、ここ」

「病院、どうせだれも使わないのだし勝手に使わせてもらったわ」

「そうか、そうだったな」

だれも、使うことはなかったのだった。

「それより、タイムリミットが近づいて来てるわ。ゆう君が倒れた
のがその証拠、少しづつだけ時間が動き出してる」

「そうか」

時間が動き出している、つまりは世界の滅びが始まったのだ。

「ゆう君、答えを聞かせて。」

今の世界を守るのか、新たな世界に行くのか」

「……」

そうだった、選択肢があったのだった。

「時間は、後どのくらいある」

「時計の針が十二周するまで、六日よ」

病院の掛け時計を見ると針が動き出していた。時間を合わせたのは井波だろう。

「限界まで考えたい、一人にしてくれ」

「そう、それが現時点でのあなたの返事なのね。」

いいわ、でも時間はないわよ。間違えないでね」

病院の出口に向かって歩いて行く井波。

「そうだ、最後に一つだけ。」

どんな選択をしようとも、私はあなたの味方よ」

最後に、はかなげな笑顔を見せて井波は去って行った。
最後のセリフを、彼女はどんな気持ちで言ったのだろう……。。

その三(後書き)

みじか!

なんじゃこりゃ、超みじけっ!

これなら、この前に投稿すればよかった

その一（前書き）

あー、心はすでに死んでいる！

「そうですね！」

体はすでに、病んでいる

「そうだな！」

その一

世界崩壊まで、あと五日。あれから、一日が経った。

世界崩壊の予兆は訪れて来ている。

井波によると、この世界では人が次々と神隠しに遭っているらしい。

それも、人がいきなり消えるらしいので間違いなく原因は……。

「結局、選ばなければいけないのか」

選ぶ、世界と一人の女性、どちらを取るべきかなんてわかりきった事だ。選ぶまでも無い。

「それが出来れば苦労しねえよな」

恋心と言うのは人を狂わせる。それが分かりきった事でも選ぶことができなくなる。

ただ、これは四年越しの恋などではない。俺にとってこの恋心は四年前の、あの時の物なのだから。

「世界を救うか井波を救うか、か。」

「選べなんて、人間の事を過大評価しすぎだぜ、神さま」

部屋を閉じ切っていたからだろうが、頭がぼんやりとしました。

その一（後書き）

すんげえ、みじけえ！

何なのこの小説（？）

やる気が感じられない？

オカシイな、書いてる時はあんなに面白く感じられたのに……

その二(前書き)

、てな訳で(どんな訳だ)一幕・その二投稿です!

その二

「ねえ、折角同じ場所にいるのだもの。一緒に遊びましょう」

あの出会いの後、俺は性懲りもなくあの公園に行っていた。

「いやだ、訳の分からない女と遊びたくない」

「じゃ、何でここに来てるのよ」

理由は簡単だった。他に行く場所がない。

そもそもこの町には娯楽施設が一切なかった。

隣町まで行けばあったが、移動の金をあの親がくれるはずがない。

あの親と一緒に居たくない、と言う理由で家も却下。飯と寝るとき以外は家に居なくなかった。

図書館ならあったが、あそこは勉強中の同級生がいる。あいつ等の顔を見るだけで吐きそうなのに、いける訳がない。

以上の理由で俺は井波の顔を見てしまうあの公園に行っていた。まあ、変な女つてだけでクラスメイトや親ほど嫌な奴でもなかったからだ。

「別に、夏休みが終わるまではここに居ていいけど、それ以降はここに来てはダメよ」

「だから、なんでだよ」

「抑えがきかなくなるから」

「抑え？　なんだそりゃ」

井波は俺に笑いかけた後

「さあ？　なんだろうね」

話をぼかした。

「やっぱ訳のわからない女だ」

「謎多き女つて素敵よ」

「どこがだよ」

「それがわからないから」

「童貞なんだろう?!　聞きあきたよ」

「いきなりレディの前で品のない言葉使わないで！ まったく、童貞はこれだから」

「おい！」

悲劇を気取ってくるくる回っていた井波がこっちを向いた。

「さて、鬼ごっこをしましょう」

「だから、いつもいきなりだなあ、おい」

「それが恋よ」

「ぜってえ違う」

「恋なんかしたこと無い、二次コンキモヲタのくせに」

「何の根拠があつてそんなこと言うんだよ！」

「とにかく、鬼ごっこよ。この公園内で逃げ回りなさい」

「？ 鬼をやってくれんのか？」

「そりゃ、追われるより追う方が楽しいじゃない。追われて楽しいなんてみんなMよねえ」

「鬼ごっこでMとS測んなよ」

「良いから逃げなさい、マゾ豚が！」

「すっげえ鬼がやりたくなって来た」

「……ふう、仕方ないわね。ほら、鬼をやっていいわよ」

「よっしやあ！」

今思えば、完璧にこいつの策略にハマっていた訳だ。

「あはははは！ 遅すぎるっ」

「ぜえ、ぜえ」

基本的にあそこまで上がって行くので体力を使いきるほど運動不足の俺が、井波に追いつける訳なかった。

「ぜえぜえ」

五分ほど走り回って俺はへたり込んだ。

「どうしたの？ へたり込んだじゃって。そんなに息を切らすほど走るのが好きなんて、とんだマゾ豚ね。ほら、足をなめてごらん」

そう言っただ足を頬に押し付けられたが、その時の俺に反抗する体力はなかった。

その二（後書き）

なるほど、これが無我の境地か

その内、この恥ずかしい駄文投稿が楽しくなるのだから

……天衣無縫の才！！

その三（前書き）

皆さん、もうお気づきですね。

そう、その三は明らかに短いのですよ

その三

「足なんてなめねえよ」

視界が、広がってゆく。

一番楽しかった頃……あの頃は全てを忘れられた。

クラスの事も、先生の事も、親の事も、嫌いだっただ自分の事も、ただ彼女の事を考えていれば良かったから。

でも、そんな日々は幻となった。俺の所為で、そんな日々を幻にってしまった。

「……そうか、全部俺のせいだったな」

壊れゆく世界、その中で動き出した時間。

全ては俺が引き起こした事だった。

動き出した運命の中で、俺は選択しなくてはいけない。

記憶に罪を刻まれながら。

ふと、時計を見ると12時間経っていた。

タイムリミットまで四日と半日。

……自らの選択を他人にゆだねる事が出来ない状況で、俺は気付いていた。

あの、嫌いだっただ世界こそが俺のいるべき世界だと。

そして、彼女のそばこそが俺にとっての救いの一つであると。

すべき選択と望む選択、その二つは相いれない。

その三（後書き）

もう少しだけお付き合い合ってください。

その一（前書き）

ホンダロック社を全力で応援する創離です

その一

遂にアフリカ大陸が消えたらしい。

緩やかに着実に世界は崩壊していく。

それを前にして、俺はまだ選択できずにいる。

世界を救うのか、救わないのか。

タイムリミットまであと二日。

それまでに決めなければ、世界も自分も……そして井波も、全てを失う。

今日はついに腹が減った。四年前ぶりの空腹だ。

スーパーに行くと、一部の食べ物食べられる様になっていた。

ここでも時間が動き出している事が分かる。

しかし、相変わらず人は動かない。それどころか半分以上が減っていた。

これならば、明日には俺と井波以外の人間は居なくなるだろう。

いや、井波を人間にカウントするのは……だが。

「あ、牛肉はいけるみたいだ」

感じの良い霜降り肉がいけそうだったのでそれを持って家に帰る事にする。井波の分と合わせて二枚鞘に入れた。

そこで例のめまいが襲ってくる。昨日の夢からすると、次はあの日の事だろう。

過ちを犯した、あの日の……

その一（後書き）

トヨタも応援しています!!

その二（前書き）

すっかり投稿忘れてました

その二

8月29日、俺の中学はこの日までが夏休みだった。進学校だったのだ。

そして、俺は学校に行くのが憂鬱でならなかった。

学校でいじめられ、そして先生が苛めを見て見ぬふりをする。それで調子に乗った奴らがまた苛める。

今までで一番ひどかったのが口の中にスタンガンを入れられた事だった。気絶して動けなくなっていたが、起きた時に居たのは保健室のベッドではなく教室の床だった。見知らぬ傷が増えていたので寝ている間にも蹴られたりしたのだと思う。

家に帰ると俺は親に怒られた。『どうして教室の床で寝たんだ！』と。教師が情報を捏造して伝えたのだ。

だが、今までも『苛められた』と言っても『どうして苛められるんだ！』と怒られるばかりだったので、もう何も言わずただ話を聞いた。

ただ、苛められるのに原因があったとすれば、それは親の所為だと自信を持って言える。

教科書代をけちって、『先生には無くしましたと言っただぞ』と教科書が買ってもらえず、制服代もやはりけちって、学校で一人ジャージだった。

そんなだからいじめられたのだ。俺は悪くない。

そう自信を持って言える。

そんな状況だったから、俺は人一倍学校に行きたくなかった。

次の日の学校の事を考えながら山を登っていると、いつの間にか公園についていた。

「遅かったのね……」

そこには彼女がいた。いつものように、堂々とベンチに座って。

「今日は何して遊ぶ？」

そんな彼女見ていて思った。

ただ、自分に接してくれる。そんな彼女があまりに輝かしくて、綺麗で、まぶしくて、

「ど、どうしたの？ ゆう君」

だから俺は、彼女に抱きついて、泣いていた。

「……大丈夫よ、大丈夫。私は神さまだから、何でも話してごらん」
「う、うう、」

そうして、全てをぶちまけた。学校の事、家での事、先生の事、そしてそんな自分にとって彼女がどれだけ特別な存在だったかを。

俺が泣きやんで、ひとしきり話し終えたときには夕方になっていた。

「ようやく全部吐き出したわね、それでいいの。」

中学を卒業したら家を出なさい。それまでは居なくてはいけないだろうけど、それさえ終わらせたらそんな所……いえ、この町から離れなさい。

それまでは、我慢しなくちゃいけないだろうけど……」

彼女は哀しそうにほほ笑んで。

「私がついていてあげられればいいのだけれど、もう無理だから

これからは、一人で生きて行く力をつけなさい。強くなつて、誰にも苛められないでいい様に」

彼女は絞り出すように言葉を連ねた。

「ねえ、ゆう君」

彼女は夕日をバックに、俺に笑いかけてくれた。

「私はあなたの事好きよ。」

だからいつか、一人で生きて行くことができる位に強くなつたら、私を迎えに来て

その時、私がどこに居るか分からないけど、きっと迎えに来るのを待ってるから」

その笑顔を見て気付いた。

いつからだっただかは分からないけれど、井波の表情が、言葉が、

そのすべてが自分を救ってくれていた事に。

「俺も、井波が好きだ」

俺にそう言われて、井波が顔を真っ赤に染めて、それがまた愛おしくて。

だからこそ、誤った。

犯してしまった。

たった一つの過ちを。

願ってしまったのだ『時間が止まればいいのに』と。

『少年よ、その願いは本物か?』

紅色から藍色に変わる空、その下に声が響き渡った。

「?!」

「なんだ、この声」

『私の声だよ』

井波はその時、初めて悔しさや後悔の表情を見せた。

「誰だよ! おまえ」

俺は必死に目に見えない何かに語りかける。

『なに、お前の願いを叶えてやろうかと思つてな。元は神だが、今は名を無くした。ただの願い事を叶えるためだけの存在だ』

「ゆう君、耳を貸しちゃダメ!」

「願い事?」

『お前は今、願つただろう。時間が止まればいいと』

「ゆう君!」

井波の声はこの時俺に届いていなかった。その時、もう俺は”それ”に魅入られていたのだから。

『お前の望み通り、時間を止めてやろう』

「そんな事が……」

「結城!」

「出来るのなら」

「やめて！ ゆう君！ もつ、背負わせたくないの！」

『その願い、叶えてやるっ』

瞬間、目の周りが閃光で覆われた。何も見えなくなり、何も聞こえなくなり、何も考えられなくなった。

時間にするほどの程度だったのだろう。いや、その瞬間から時間なんて意味を持たなかった。なぜなら、俺の時間はその時に止まってしまったのだから。

眼を覚ますと、そこには井波が寝ていた。

『さすがに神が近くにいたのでは上手くいかないか。四年分の時間しか止められん。』

しかし少年、これで望み通りこの世界の時間は止まった。

全ての時間とまでは行かなかったが、十分だろう？』

言葉はほとんど耳に入らず、俺は井波しか捉えていなかった。

「井波！」

俺は井波に呼び掛け、その背を支え体をゆすった。

「ゆう……くん？」

井波が意識おぼろげに名前を呼ぶ。

「結城！」

そして二度目、俺を呼び掛けるその声には怒りしか含まれていなかった。

「お前は！ 自分が何をしたか分かっているのか！」

『うーん、昔の様に上手くは行かないな。』

神の時間を止めることもできないのか』

キッ！ つと井波はその場を睨んだ。

「どうして！ どうしてお前は出てくるんだ！」

『なぜ？ お前のおかげだよ。神さまが、人間の言葉に動揺しちやだめだろ！』

「くっ」

白い霧が出てきたかと思うとそれは犬の形に固まった。

『はっはー！ ようやく、ようやくだ！ どうしたよ？ 井波ちや』

「ん？ まさか本当にその人間に恋でもしたか？ とち狂ったか？
ああ?!」

その化物は井波を挑発する。

「二度と見なくなかった面だ。失せる！」

「ああ？ なに言ってるの？ 俺のおかげですーとこいつと一緒に居られるんだぜ？ 感謝しろよ」

「結局、運命は変わらない……か」

今までと違う、その冷血な目は俺を捉えていた。

「ゆう君」

『井波ちゃん、何する気だよ』

「君はまた背負わなければならぬ」

そう言っつて、井波が犬に触れると犬は霧に還り井波に吸い込まれた。

「さて、結城。君には選んでもらう。

世界を救うか、私を救うか」

「え？」

「君が願ったモノ、あれは呪いよ。願いの対価は世界そのもの。

私はそれを取りこみ呪いそのものになった。

だけど、世界が壊れるのを止めた訳ではないの」

「……」

「この呪いは願った本人が呪いを殺すことで解呪されるの

君が世界を守るといふなら、君が私を殺しなさい」

「?!」

「でも、私だつて鬼じゃないわ。私を好きだと言ってくれた君を相手に殺す事を強要は出来ない

だから、もし私とありたいのならこの世界を捨てて新たに世界を作る事が出来る」

俺はその時どんな表情をしていたのだろう、きつと希望と絶望が入り混じった顔に違いない。

「この世界、それが君の背負うべき業。」

四年がタイムリミット。……四年後に答えを聞かせてもらおうわ
そうして井波は俺の前から姿を消した。

その二（後書き）

まあ、忘れてても問題なかったわけですが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0749v/>

Love Letter

2011年8月3日03時15分発行